

サブプロ (b) 「集客施設で地震観測する理由～成田国際空港との連携」

酒井 慎一 (サブプロ (B) 統括/東京大学地震研究所観測開発基盤センター 准教授)



酒井氏は、大災害時の対応について BCP の深度化を目指し活動している成田国際空港と連携し、同空港における地震観測の取り組みについて報告しました。

同空港は年間 4000 万人強、1 日約 11 万人の利用者があり、約 5 万人の従業員が働いています。敷地面積はおよそ 1200ha で、建物が約 400 棟あり、敷地中央に建物が集中していて、周りに滑走路やその他施設があるということです。酒井氏は、空港内の 10 カ所に簡易型の地震計を置き 2 週間測定を行った結果を報告しました。それによると、同じ地震でも「場所によっては 3 倍近い揺れの差が出た」ということです。

酒井氏は、首都圏における地震は避けられないという前提で、「どこかで被害があったということを伝えてもらわないと把握が難しい。誰かが見に行くなどして確認しなければいけないが、簡単な装置でもいいので地震計が各所があれば、その揺れの分布から、ある程度被害が推定でき、次の行動を先に起こしたりすることにつながられるのではないかと思う」と敷地内における複数箇所で継続的に測定する意義について説明しました。

さらに酒井氏は「揺れには必ずいろいろな癖がある。それをあらかじめ知った上で、その場所や地域、建物に合った対策をしておけば、実際に事が起きたときに被

害をだいぶ軽減できる」と強調しました。また「事が起きた後でも、どこの揺れが大きかったか、がすぐに把握できれば、次の救援・救助や、避難する人たちがどちらに逃げるべきかということの指針を出せる」と述べ、継続的な調査が発災時の救助や避難に役立つということを指摘しました。

成田空港での地震観測 空港内各所で2週間の連続観測

